様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：６４３０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２３０３８

研究課題名（和文）宗教文芸から見る顕密仏教の究明―中世高野山を中心として

研究課題名（英文）Exploring Kenmitsu Buddhism from the Perspective of Religious Literature and Art: Focusing on Medieval Koyasan

研究代表者
郭　佳寧（Guo, Jianing）

国際日本文化研究センター・総合情報発信室・特任助教

研究者番号：００８４８７３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中世高野山の宗教世界について、宗教者の実践活動、寺院空間にあらわれる教学と信仰のあり方、宗教言説の成立と展開の3つを軸に研究を進めてきた。代表者は大伝法院の創建過程における覚鑁の真言教学の理念と鳥羽院の宗教政策を考察し、大伝法院建立の意義と位置づけを論じた。また、大伝法院本堂の内部荘厳を考察し、真言教学はいかに儀礼の場に表象されていたのかを明らかにした。それに『高野山往生伝』への分析を通して、中世高野山の霊地信仰の在り方を窺うことができた。更に、覚鑁における不動明王説話を取り上げ、大伝法院の法流移転という重要な問題が宗教言説においてどのように語られ、展開されていったのかを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、政治・社会・宗教などの歴史的位置付けを重視する歴史学研究に対し、宗教テクスト学及びその体系を正しく認識することで、歴史を再認識することを可能にした。また、宗教文芸という概念を活用することによって、既存の研究分野にとどまらず、より広い視座のもとに宗教文化諸分野の専門や海外でも共有でき、国際的な研究に寄与することも可能であると考える。
また本研究の社会的意義として、中世日本の宗教文化の豊かさと多様性の認識に貢献することが挙げられる。顕密仏教が政治史や宗教史の範疇を超え、文学・美術・儀礼など多岐にわたる要素が含まれ、宗教文化が介した日本人の「心性」への社会的関心が一層高められるであろう。

研究成果の概要（英文）：This research has been conducted on the religious world of medieval Koyasan, focusing on three main themes: the practical activities of religious figures, the nature of teaching and belief as manifested in the temple space, and the formation and development of religious discourse. The representative discussed the significance and positioning of the construction of Daidenpo-in by examining Kakuban's philosophy of Shingon doctrine and Toba-in's religious policy during the process of Daidenpo-in's foundation. Moreover,the research examined the inner solemnity of the main hall of Daidenpo-in Temple and clarified how Shingon doctrine was represented in the place of ritual. In addition, through the analysis of "Koyasan Ojoden", it was possible to see the nature of medieval Koyasan's belief in sacred places. I also took up the tale of Fudo in Kakuban, and examined how the important issue of the transfer of the teachings of Daidenpo-in was discussed and developed in religious discourse.

研究分野：日本中世文芸

キーワード：高野山　院政期　顕密仏教　覚鑁　大伝法院　寺院空間　宗教言説

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初の研究背景は、以下のようにまとめられる。

歴史学者黒田俊雄氏が提起した「顕密体制論」は、単なる政治史と宗教史の問題だけではなく、経済・寺院組織・思想・教理・儀礼・文芸の研究もその射程に収められている。そして、「顕密体制論」の影響を受け、中世日本の基盤である「顕密体制」に対する研究の深化とともに、日本史研究をはじめ、顕密仏教をめぐって各分野からの研究が盛んに行われる。また、平雅行氏と末木文美士氏による「顕密体制論」をめぐる新たな歴史理論の提唱、及び寺院聖教など新資料の発見により、顕密仏教に関する研究は多方面からとらえられるようになった。しかしながら、顕密仏教に関する研究はなお既存の歴史論理に捉われ、新たな研究開拓の可能性が乏しい傾向にある。それに関する具体的な問題点を、以下に①～③として挙げる。

①　中世権門寺院、及び教理研究に集中する傾向

「顕密体制論」の補完理論である「権門体制論」の影響を受け、中世顕密仏教に関する研究では、権門寺院に集中する研究傾向がみられる。また、個人の宗教家への検討は教理研究という次元にとどまることが多い。そのような研究傾向のもとでは、中世顕密仏教の全体像、一種の宗教文芸表象としての宗教家の思想、及びその活動の本質がみえなくなってしまう。それを解明することこそが、顕密仏教の実態と意義を総体的に浮かび上がらせることができるのではないかと考えられる。

②　新たな研究概念の活用

中世日本の宗教世界に関する従来の研究では、宗派・教理・儀礼・文学・美術・建築などそれぞれ分野ごとに目覚ましい研究成果が収められた。一方、中世日本の全体像を把握するため、また分断される研究分野の限界を克服するために蓄積された各分野の研究成果を利用する上で、新たな概念を用いることも志向されている。阿部泰郎氏が『中世日本の宗教テクスト体系』（名古屋大学出版会、2013）において提起した「宗教テクスト」、また小峯和明氏が『中世法会文芸論』（笠間書院、2015）において創唱した「法会/宗教文芸」がそのような問題意識によるものである。そのような「宗教テクスト」、「法会/宗教文芸」など新たな研究概念の創出によって、中世日本における新たな研究の可能性が導かれる。しかし、新しい研究概念を積極的に用いる研究が少ないのが現状である。そのため、新しい概念を導入し、新たな側面から、分野横断的に中世日本における顕密仏教、及びそれと共生する顕密体制を考察する必要がある。

③　宗教テクストへの認識欠如

中世日本における顕密仏教に関する研究の基盤となるのは宗教テクストだといえるだろう。阿部泰郎氏は、宗教テクストは、宗教の根本的な教義である教祖の言説とそれをめぐる種々な解釈（文字）、その思想の具現化として作られた尊像（図像）、また信仰を実現するための宗教実践（儀礼）、そのすべてが宗教テクストであると定義した。阿部泰郎氏によって宗教テクスト学が提起され、その体系が明確に整理されたが、中世顕密仏教研究においてはまだ積極的に利用され

ていない。一方、本研究の研究代表者が指摘した宗教テクストへの認識の欠如は、次の二点である。一つは、宗教テクストそのものへの理解が足りないこと。もう一つは、現存する宗教テクストへの考察と分析はまだ不十分だということである。

上述のような研究背景のもとに、本研究が構想されたのである。

２．研究の目的

本研究は、宗教テクストの読解と分析（新資料調査及び既存資料の再検討）を基本作業とし、中世高野山、特にそこで活動した人々に注目し、宗教文芸の視座から、中世日本における顕密仏教の実態、及び顕密体制そのものを見直そうとする。本研究において用いる宗教文芸とは、種々な実践をともなう法会や芸能を包摂し、更に仏教儀礼とそのテクスト、仏事法会を行う〝場〟である寺院空間、堂塔の内部荘厳である仏教美術、またその全体と関わる仏教教学と仏教説話などを指すものである。また、宗教テクストについては、阿部泰郎氏によって提唱された宗教テクストの体系を用いる。本研究が最も焦点化しようとするのは、中世高野山の宗教世界の実態の解明、および宗教文芸の体系から中世日本の顕密仏教の究明である。

３．研究の方法

本研究は如上の目的を達成するため、詳細な研究計画のもとに研究を開始したものである。そこで本研究においては、寺院聖教などの実地調査を行いながら、具体的に次のⅠ～Ⅴの作業をしながら、その整理・考察結果を統合的に分析した。

Ⅰ聖教の目録･書誌化:代表者は高野山と大伝法院をめぐって、文献ごとそれぞれ関連する典籍、宗教者、書写・伝授のルーツなどを整理し、書物を通して中世高野山における「知のネットワーク」を目に見える形で示した。

Ⅱ注釈・校訂：Ⅰで得た資料の注釈・校訂作業を行った。中には、儀礼テクストの分析に焦点を当てた。儀礼テクストの解読を通して、教理を実践する覚鑁の宗教活動の形態が確認できた。

Ⅲ宗教説話への再解釈：Ⅰの寺院聖教調査とともに、寺社縁起・祖師伝記などの仏教説話の分析と考察を行った。即ち、寺院聖教が語る宗教史の軸と並列し、文学が持つ力を再評価することによって、より立体的な中世高野山の宗教世界が浮かび上がってきた。

Ⅳ宗教空間への検討:宗教実践を統合的に解明するため、儀礼が行われる〝場〟への注目は不可欠である。代表者は文字史料・図像資料、教相書・儀礼テクストを用いて、宗教空間に表象される教学の在り方について検討を加えた。また、Ⅲで得られた知見を踏まえ、宗教空間がどのように叙述されていたのかを読み解き、教学における裏付けを明らかにした。

Ⅴ信仰・思想分析：Ⅰ～Ⅳの考察を踏まえ、覚鑁とその周辺における真言教学の形成、宗教実践の在り方とその裏付けなどが明らかにされ、覚鑁の真言教学の思想的内実を解明できた。

４．研究成果

本研究は中世高野山の宗教世界について、「宗教者の実践活動の意義と影響」、「寺院空間にあらわれる教学と信仰のあり方」、「宗教言説の成立と展開」の３つを軸に宗教文芸および思想史の視座から中世高野山の信仰世界について研究を進めてきた。「宗教者の実践活動の意義と影響」

に関して、高野山大伝法院の創建、伝法会の復興、及び大伝法院寺院組織の確立過程における覚鑁の真言教学の理念と鳥羽院の宗教政策を考察し、高野山における大伝法院建立の意義と位置づけを論じた。また、儀礼テクストとしての講式とそれを執り行う場に注目し、高野山大伝法院流をはじめとする中世真言僧の信仰と実践の在り方について考察した。「寺院空間にあらわれる教学と信仰のあり方」において、高野山大伝法院本堂の内部荘厳について考察し、覚鑁の真言教学、および密教信仰はいかに大伝法院本堂という伝法会を行う儀礼の場に表象されていたのかを明らかにした。「宗教言説の成立と展開」について、『高野山往生伝』への分析を通して、中世高野山の霊地信仰の在り方、また高野山における宗教家の活動を考察し、その背後にある大伝法院側の関与および当時の権門寺院の実態を窺うことができた。また、中世高野山における浄土信仰の在り方、それと関わる宗教者の宗教実践、特に臨終行儀について分析してきた。それらの考察を通して、中世の高野山は浄土信仰のもとに諸宗兼学の場が形成された実態を明らかにした。更に、覚鑁における不動明王説話を取り上げ、大伝法院の法流移転問題を仏教文学においてどのように語られ、展開されていったのかを検討した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 郭佳寧	４．巻 19
２．論文標題 安楽寿院不動堂の再解釈―鳥羽院の往生信仰をめぐって―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本仏教総合研究	６．最初と最後の頁 ８７－１１０
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郭佳寧	４．巻 114
２．論文標題 覚鑁における不動明王説話の系譜	５．発行年 2021年
３．雑誌名 名古屋大学国語国文学	６．最初と最後の頁 １－１６
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郭佳寧	４．巻 5
２．論文標題 高野山大伝法院創建における覚鑁と鳥羽院	５．発行年 2022年
３．雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	６．最初と最後の頁 ４１５－４３２
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 郭佳寧	４．巻 55
２．論文標題 『高野山往生伝』があらわす宗教世界―中世高野山信仰についての一考察―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『説話文学研究』	６．最初と最後の頁 133-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 郭佳寧
２．発表標題 覚鑁における不動明王伝説の系譜
３．学会等名 名古屋大学国語国文学会2020年度大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 郭佳寧
２．発表標題 安楽寿院不動堂の再解釈―覚鑁における不動明王伝承をめぐって―
３．学会等名 第19回日本仏教綜合研究学会学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 郭佳寧
２．発表標題 『高野山往生伝』における密教と浄土教」
３．学会等名 説話文学会2019年度大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 郭佳寧
２．発表標題 高野山大伝法院からみる覚鑁の密教観－本堂後壁絵を中心として―
３．学会等名 EACJS第4回国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 郭佳寧
２．発表標題 中世日本の密教空間にみられる唐宋仏教の影響―高野山大伝法院を中心として―
３．学会等名 中日学術会議「中国古文献の投影と展開―日本古典文学研究の新地平―」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 郭佳寧
２．発表標題 宗教儀礼テクストに展開する実践と信仰の複合性―覚鑁撰『舎利供養式』を巡って―
３．学会等名 国際シンポジウム「宗教遺産をめぐる真正性ー宗教遺産テクスト学の発展的展開ー」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 郭佳寧
２．発表標題 密教浄土教に展開する舎利と宝珠―覚鑁の講式とその儀礼空間―
３．学会等名 国際ワークショップ「日本中世のことば・ほとけ・図像」（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 近本謙介（編）	４．発行年 2022年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 511
３．書名 ことば・ほとけ・図像の交響―法会・儀礼とアーカイヴ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関